

手作業での収穫風景(羽後町田代)

刈り取った稲束は「ハサガケ」で太陽の恵みにお任せする

黄金色に稔って揺れる稲穂にあやかって作られた、という竿燈を差し上げる行事も、四年ぶりにいつもの状態で終了し、秋の気配が忍び寄ってくるようになった。田んぼの色調は鮮やかな黄金色に変わっていくが、秋田空港へ向かうとき、仁井田で右折して空港道路を走っていくと、農村風景としては馴染めない巨大なカントリーエレベーターの屹立する光景が目に入ってくる。

空港道路が雄和に入ったあたりの田んぼで、農作業の手伝いをしたことがあった。サラリーマン家庭に育ったので、農作業の手伝いは初体験だったのだ。

地名に〇〇新田と記されているように、現場となっている田んぼは、雄物川沿いの

湿地帯を開墾したところだったので、ぬかるみに機械がはまると一大事の事態になった。手伝っていた妻の実家は専業農家で、田植えから稲刈り、籾の乾燥まで全ての工程を機械に頼っていたのだ。言うまでもなく過剰投資の設備で、機械への経済的負担、メンテナンス作業も多く、恵まれた営農環境とはいえなかった。

羽後町田代では、「循環農業」という人手の要る昔ながらの懐かしい田んぼが広がっている。田起こし、田植えは機械化されているが、収穫は人手を集約的に注ぐ「ハサガケ」という自然乾燥を行っている。刈り取りはバインダーという、「刈って結束して横へ放る」という手作業に近い仕事を

してくれる機械を使うのだ。刈り取った稲束はハサガケに吊り下げて、二、三週間太陽の恵みにお任せする。

何故「循環」なのか。それは、和牛を飼育している農家は、ワラを餌として与え、牛小屋に敷き、寝床になったワラと牛糞は肥料にして再利用するのだ。

秋田の農村風景を撮影して思うのは、上小阿仁村八木沢にあった稲を天日干しするために立てた栗の柱「あも」と田代の「ハサガケ」は、省力化と自動化を推し進めて現代農業で失った、稲を崇める農民の信条を感じさせるオブジェとして記録していきたい。

秋田の農村風景は一様ではないのだ。